

潜在的自尊心のバッファリング効果の検討

—困難課題後の感情を指標として—

稲垣 勉^{1,2} 澤海 崇文^{1,3} 相川 充^{1,4}

¹教育テスト研究センター ²鹿児島大学 ³流通経済大学 ⁴筑波大学

人は、自尊心が脅かされるような困難な課題に直面しても、潜在的自尊心 (Implicit Self-Esteem) が高ければ、それがバッファとして機能するため、ネガティブな感情が生じにくいことが先行研究において示されている (藤井, 2016; Fujii, Sawaumi, & Aikawa, 2014; Greenwald & Farnham, 2000)。本研究は、これらの先行研究に基づき、潜在的自尊心のバッファリング効果に関するデータの蓄積を目指して研究を行ったものである。37名の大学生・大学院生を対象に実験を行った結果、先行研究と同様の傾向は観察されたものの、その傾向は統計学的には有意に至らなかった。今後はサンプルサイズを十分に確保した上で、さらなる検討が望まれる。
キーワード：潜在的自尊心、バッファリング効果、Implicit Association Test

1. 問題と目的

自尊心 (Self-Esteem; 以下 SE) は、自己に対する肯定的または否定的な態度 (Rosenberg, 1965) と定義され、種々の先行研究において心理的健康に関わる諸指標と関連することが繰り返し示されてきた。たとえば、SE の高さは抑うつ・不安、孤独感などのネガティブな感情とは負の相関がある一方、人生に対する満足感といったポジティブな感情とは正の相関があると報告されている (藤井, 2013, 2014; 伊藤・小玉, 2005)。

従来から SE の測定には自己報告式の尺度が用いられてきたが、近年は内省を伴わない手法による測定も盛んになっている。自ら意識することが困難な潜在的 SE (Implicit Self-Esteem; 以下 ISE) の測定法の中で多用されている手法の一つが、Implicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 以下 IAT) である。ISE を測定する IAT は、「自己」と「快い」という概念間の連合強度と、「自己」と「不快な」という概念間の連合強度の差を ISE の指標とするものである。

これまで複数の先行研究において、自身の SE が脅かされるような事態では、ISE はその脅威を低減するバッファとして機能することが示されている (藤井, 2016; Fujii et al., 2014; Greenwald & Farnham, 2000; 稲垣・大浦・松尾・島・福井, 2017)。このことは、自ら意識することが可能な顕在的 (Explicit) な SE のみならず、ISE を育む介入プログラムの重要性を示していると言えるだろう。ただし、本邦において ISE のバッファリング効果を検討している研究はきわめて少なく、知見の蓄積が必要であると思われる。

上記を踏まえ本研究は、ISE のバッファリング効果に関する知見を新たに加えることを目的として、SE が脅かされるような困難課題を経験した際、ISE が高ければネガティブな影響は低減されるのか否かを検討する。本邦における先行研究には Fujii et al. (2014) があるが、彼らは困難課題として実用英語技能検定 (以下、英検) の問題を使用していた。参加者が普段から英検 (もしくはそれに準ずる) の問題に触れているとは考えにくく、この問題の出来が参加者の自尊心を脅かすようなものであったか議論の余地がある。そこで、本研究では課題を実施する前に、当該課題の診断性に関する情報を教示することで、参加者の自我関与を高めるとともに、失敗時に自尊心に脅威を与えることを期した。

2. 方法

2.1 参加者 九州地方の国立大学に通う大学生・大学院生 37 名（男性 11 名，女性 26 名，平均年齢 21.0 歳， $SD = 1.4$ ）が実験に参加した。

2.2 材料 (a) 自尊心 IAT（藤井・澤海・相川，2014；藤井・上淵，2010），(b) 達成関連感情尺度（奈須・堀野，1991）より「後悔」「無能感」各 3 項目・6 件法，(c) アナグラム課題（市村・上田・楠見，2016）より 20 問（易課題・難課題 10 問ずつ）を用いた。なお，本研究では他の尺度も使用したが，本研究の検討課題とは関連しないため報告は割愛する。

2.3 手続き 参加者に実験用プログラムへアクセスするための URL をメールにて案内し，PC を用いて自尊心 IAT を含む一連のプログラム（Inquisit Web License で制御）の実行を依頼した。その際，30 分程度の間，集中できる静かな環境を確保した上で実験プログラムを遂行するよう求めた。参加者は最初に自尊心 IAT を遂行したのち，ランダムに易課題群（ $n = 15$ ）・難課題群（ $n = 22$ ）のいずれかに割り当てられ，それぞれ難易度の低い／高いアナグラム課題（1 問の制限時間は 15 秒）を 10 問遂行した（難易度は市川他（2016）で示されている困難度評定値を参考にした）。この際，両条件ともに，当該課題の出来は将来の成功（大学院入試や就職試験での成功）と関連がみられることが確認されているという旨の教示を行い，自我関与を高めるとともに，失敗した際に自尊心に脅威を与えるよう操作した。その後，操作チェック項目（e.g.，「この課題は難しかった」，「普段から，こうした並び替え課題を解く機会が多い」）や課題の重要度（e.g.，「この課題は，自分にとって重要だと思う」），達成関連感情について尋ね，実験を終了した。課題実施後，アナグラム課題実施前に行った教示は事実とは異なるものであったことを説明する Web サイトに案内し，実験の性質上，こうした教示を行わざるを得なかったことを謝罪した。その後，参加者に個別に連絡を取り，謝礼として図書カード 1000 円分を送付した（この際にも，実験の目的について入念な説明を行った）。本実験の所要時間は概ね 20 分程度であった。

3. 結果

3.1 操作チェック 易課題群と難課題群との間で，難易度の主観的評定値に差があるか否かを検討するため，難易度評定の操作チェック項目について対応のない t 検定を実施したところ，両群の平均値差は有意であった（易課題群，難課題群の順に $M = 3.00, 5.00$; $t(35) = 8.83, p < .01$ ）。したがって，難易度の操作は有効であったことが確認できた。また，課題の重要度の認知についても同様の検定を行ったところ，両群の平均値差は有意ではなく（易課題群，難課題群の順に $M = 3.00, M = 2.91$; $t(35) = 0.23, ns.$ ），両群ともに同程度であったことを確認した。

3.2 ISE のバッファリング効果の検討 後悔（ $\alpha = .65$ ）と無能感（ $\alpha = .62$ ）の各得点を従属変数，群（易課題・難課題；それぞれ -1 と +1 を割り当てダミー変数化）と ISE（Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) の D 得点を算出）および両者の交互作用項を独立変数とした階層的重回帰分析を行った。操作チェック時にアナグラム課題への慣れを測定しておいたため，この値を step1 で投入し統制した。step2 において群・ISE を独立変数として投入し，step3 で両者の交互作用項を投入した。以下，最終ステップである step3 の結果を報告する。

一連の分析の結果，後悔に関しては群・ISE および両者の交互作用のいずれも有意な影響はなかった。無能感に関しては群の主効果が有意であり（ $b^* = .47, p < .01$ ），難課題群の無能感が高かった。また群と ISE の交互作用が有意傾向であり（ $b^* = -.28, p = .09$ ），単純傾斜の検定を行ったが，有意な結果は観察されなかった。参考までに結果を Figure1 に示す。

4. 考察

無能感というネガティブ感情に対し，群と ISE の交互作用が有意であったことは先行研究（Fujii et al., 2014）を支持する結果である。ただし，本研究で観察された交互作用に対

する単純傾斜検定の結果は有意には至らなかった。したがって、本研究のデータのみでは、ISEのバッファリング効果を明確に示したとは言い難い。

本研究で対象とした参加者は37名と必ずしも多くないことや、各群の人数に偏りがあることを踏まえ、今後はサンプルサイズを増やした上で、あらためて検討を行いたい。

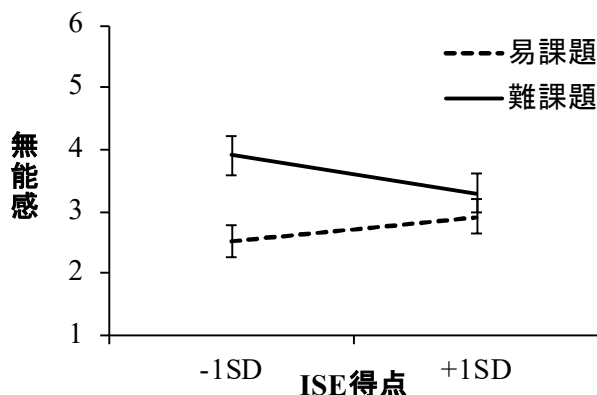


Figure1 無能感得点に及ぼす課題の難易度 (易・難) および ISE の交互作用の影響

5. 参考文献

藤井 勉 (2013). 対人不安 IAT の作成および妥当性・信頼性の検討 パーソナリティ研究, 22: 23–36.

藤井 勉 (2014). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連 心理学研究, 85: 93–99.

藤井 勉 (2016). 大学生の潜在的・顕在的自尊心が試験後の感情に及ぼす影響：特に潜在的自尊心のバッファリング効果に注目して 人文科学研究, 34: 449–470.

Fujii, T., Sawaumi, T., & Aikawa, A. (2014, February). Buffering effects of implicit self-esteem after failure experience: Investigation among Japanese people. *Poster presented at the 15th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Texas, USA*, 248.

藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2014). 顕在的・潜在的自尊心の不一致と自己愛——自己愛の 3 下位尺度との関連から—— 感情心理学研究, 21: 162–168.

藤井 勉・上淵 寿 (2010). 紙筆版 IAT を用いた自尊心査定の試み 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 61: 113–120.

Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000). Using the Implicit Association Test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79: 1022–1038.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: the Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74: 1464–1480.

Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85: 197–216.

市村賢士郎・上田祥行・楠見 孝 (2016). 清音ひらがな 5 文字のアナグラムデータベースの作成 心理学研究, 88: 241–250.

稲垣(藤井) 勉・大浦真一・松尾和弥・島 義弘・福井義一 (2017). 顕在的・潜在的自尊心が社会的排斥後の感情に及ぼす影響 九州心理学会第 78 回大会発表論文集.

伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53: 74–85.

奈須正裕・堀野 緑 (1991). 原因帰属と達成関連感情 教育心理学研究, 39: 332–340.